じょなよ〜んｅ

「描きたい，生きたい」で102歳

洋画家野見山暁治先生が亡くなった。享年102。天寿と天命を全うした方だった。

長野県上田市の「無言館」の土台を築いた当時は，東京芸大教授。そこに窪島誠一郎が出現し，二人三脚で戦没画学生慰霊美術館を建てた。〈いい絵の美術館はあるが，絵と共感できる美術館は，ここだけ〉と先生が確言するように，そこの石畳の床にはいつも，観覧者の呻きが漂っている。

僕が初めて先生の油絵と対面したのは８年前，2015年早春「金山康喜のパリ－1950年代の日本人画家たち」展だ。雷雲のような迫力を実感した。２度目が21年正月明け。日本経済新聞社主催「100歳記念　すごいぞ！野見山暁治のいま」である。日本橋高島屋催場の低い天井を，約60点の大作油絵パワーは突き破っていた。

（上）ひとなつっこい　2011年　88×145cm
（下）ベルギーのボタ山　1954年　72×100cm
いずれも「図録」より複写

同展でＲＫＢ毎日放送番組のビデオで「野見山先生のナマ姿」を観た。テレビクルーと一緒にパリ再訪，ビフテキを喰い，フランス語で住民に話しかけ，あちこち２万歩も歩き廻る８分の映像。もう数キロメートルしか歩けなくなった吾が身を省み，その怪人ぶりにびっくりした。

東京美術学校＝現東京芸術大学卒業の1941年組，42年組の出征画学生は，ほとんど戦死か戦病死した。たまたま結核罹患で落第した先生は，その歴史的運命からこぼれ落ち43年秋にくりあげ卒業。即召集，対ソ国境守備隊に派兵されたが，結核再発。満州国，朝鮮の軍結核療養所満員のため，さらに福岡市内の療養所に移送されて敗戦を迎えた。

先生が天命とし，戦没画学生たちの鬼哭「絵を描きたい，ああもう時間がない」を証言しつづけたのには，そういう昭和16年17年の時代背景があったのだ。〈無言館の死者の眼差しが，他愛なく時代に押し流されてゆく僕たちを，じっと見つめているような気がしてならん〉この言葉には苦渋の味がこもっている。1952～64年と12年間パリ私費留学。その初期，３年がかりで夫人陽子をパリに呼び寄せたのに，１年後の56年10月８日，癌のため亡くす。早すぎた29歳の死。その全経験をもとにした実録小説「パリ・キュリイ病院」は，在外邦人癌闘病記として，今日なお最高峰にある。

先生の絵は具象から抽象さらに心象風景へと，自由奔放に変化しつづけた。変貌つづけるそのエネルギーにこそ，作品の魅力があるのかもしれぬ。